

— 会議報告 —

東亜日本語教育国際検討会について

大坪 一夫

(専門日本語教育研究会会長 麗澤大学教授)

「東亜日本語教育国際検討会」が2002年11月1日から11月5日までの5日間、中国、天津外国語学院で開催された。筆者は、その会に出席する機会を得たので、簡単に報告する。

『東亜日本語教育国際検討会論文集』は、739ページからなる大論文集で113の論文が掲載されている。

研究は、6つの分科会で発表された。6つの分科会名と発表件数は、それぞれ、「言語1」、22件、「言語2」、22件、「言語3」、20件、「文学と文化」、21件、「教育1」、20件、「教育2」、20件だった。発表件数が125件になり、論文集の113件と矛盾するが、運営が非常に鷹揚で、発表者の遅参、欠席等があり、おおよその数とっていただきたい。言語関係の発表件数が64件(51%)、文学・文化関係の発表件数が21件(17%)、教育関係の発表件数が40件(32%)であった。これは、日本語教育学会誌『日本語教育』の100号までのうち、前半50号に見られる傾向に類似している点には注目しておくべきであろう。

中国側の発表内容は、玉石混交であるといえる。中には、論文の書き方の指導を全く受けていないのではないかと思わせる論文も含まれており、感想文に過ぎないと酷評せざるを得ないものも散見した。

おおよその発表内容について概観したが、その中で、専門日本語教育に関係すると思われる研究は、やや広めに採って以下の4件であった。

1. 牛 伶俐 「日本語教育における医学専門日本語教育の位置付け—現状から見られる問題点について」
2. 聶 中華 「複合型人材を目指す日本語教育の改革」
3. 于 乃明 「日本語教育から日本研究へ」
4. 堀井恵子・門倉正美「アカデミック・ジャパニ

ーズとは何か—どのようにその力をつけていくか—」

この4件の研究は、第5分科会の教育1でなされたものである。1. は、教材論、2.、3. は、大学の行政的努力の紹介。4. は、「日本留学試験」の紹介である。

牛氏の要旨は、医科大学における日本語教育の目的は「ただ基礎言語知識を教えるだけでなく、専門分野の文章を読むことによって、専門知識や技術や思想などを理解する力を養うことだと言えよう」と述べ、「特に初級教育に相応しい教科書はない」と現状を分析する。そして、「学習目的と教える内容と一致されていない」ことをその原因の1つであるとする。そして、一足飛びに、改善案を「教材開発に関しては、単一シラバス(構文シラバス)の代わりに(マ)機能シラバス、場面シラバス、課題シラバスなどの複数シラバス」の採用を提案し、内容面からは、「医学専門分野の文章だけでなく、医学事情や医者が患者を(マ)接する場面の言葉遣い」にも触れる必要性を強調する。また、初級教材を編纂する場合は、「①文が長くないこと ②1課の新出単語が多すぎないこと ③語彙は使用頻度が高いこと ④内容が将来の専門分野に役立つこと ⑤1課の量が多すぎないこと⑥内容が学生の興味を湧かせること」に留意すべきであるとする。しかし、その主張が何に基づいているかについては何も述べていない。

自戒を込めて、この発表の問題点を述べることにする。教育目的を述べた部分で、「専門分野の文章を読むことによって、専門知識や技術や思想などを理解する力を養うこと」と述べているが、「読むこと」が何を意味するかについては触れていない。実際のところ、われわれは、「読解」とは何かを未だ完全には理解していないのではないだろうか。「読解」は、構成概念に過ぎないということを理解しておかなければ、無意味な研

究を積み上げる結果になることを理解しておくべきであり、少なくとも、牛氏は、そのことに気づいていないように読める。もちろん「聴解」「会話」「作文」のいずれも構成概念に過ぎないことは明らかである。より抽象的な「言語能力」「伝達能力」などにいたっては、当然のことである。

さらに、初級教材編纂上留意すべきことの①「文が長くない」が1文何文字を長いとしているのかが述べられていない。②、⑤の「多すぎない」でも、何個以上が多いのかが明示されていない。当然のことだが、これらは、十分に研究の対象になる問題であり、その研究結果を示すことによってしか、問題解決に結びつく提案にはならない。⑥についても、同様である。教材の内容について学習者が熟知しているもの、あまり知らないもの、全然知らないものでは、どれが「内容

が学生の興味を湧かせる」ものなのかという研究が重要だろう。「興味を湧かせる」要因は何かへの答えがなければ、提案があっても、問題解決には結びつかないことに気づく必要がある。そして、これも重要な研究課題の1つである。

上で、私は、「自戒を込めて」と述べた。「読解」、「聴解」、「会話」、「作文」、「言語能力」、「伝達能力」などを、われわれは、きちんと構成概念に過ぎないことを理解した上で研究を進めているのだろうか。日本語教育に関連のある研究者のすべてが「明瞭にそうだ」という自信は、私にはないことを告白しておく。

この文章で、やや、研究内容に厳しい評価をしたが、今後の中国での日本語教育研究の一層の発展を願うことである。ご寛恕のほどをお願いしたい。

